

イザヤ書 1 : 18

ヨハネによる福音書 13 : 1~11

「洗足」

【招詞】詩編 34 : 6~9

【讚美歌】 2 4 「たたえよ、主の民」

【詩編交読】詩編 6 編

【赦しの宣言】イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 2 0 2 「よろこびとさかえに満つ」

【祈祷】

【聖書】イザヤ書 1 : 18、ヨハネによる福音書 13 : 1~11

【説教】「洗足」

<僕に仕える王>

今は毎週、イエスさまの受難週の歩みを辿って御言葉を聞いています。

先週は、マタイによる福音書から、イエスさまが子ろばに乗って、エルサレムの町に入られた場面の御言葉を聞きました。

「子ろば」に乗られたのは、旧約聖書に、まことの王は、子ろばに乗って来られる、と預言されていたからです。イエスさまは、その預言を実現する、神さまに遣わされた、まことの王さまとして来られました。

また、イエスさまが、地上の強い王のように、煌びやかな軍馬や戦車に乗るのではなく、貧しい、小さな「子ろば」に乗ってこられたのは。イエスさまという王さまは、軍事力や抑圧によって支配する王ではなく、愛と恵みによって支配なさる、柔和な王、平和をもたらす王である、ということを示しています。

そのように、エルサレムに、まことの王さまとして来られたイエスさまが、今日の場面では、弟子たちの足を洗われます。

それはまさに、この柔和な王さまのご性質を現わす出来事でした。

さて、人の足を洗うこと。それは当時、はるばる旅をしてやって来た客に、それを迎える家の主人が、おもてなしとして、足を洗う水を用意するのが一般的だったようです。

人々はサンダル履きだったので、移動すると砂埃で足がとても汚れたからです。足は、体の中でも、最も汚れた部分の一つとされていました。

ですから、おもてなしと言っても、主人は水を用意するだけで、実際に客の足を洗うのは、家の奴隷の仕事でした。

そのような、奴隷がするようなことを、まことの王として来られたイエスさまが、弟子たちに対してなさった、というのが、今日の聖書箇所なのです。

#### <ご自分の時を悟って>

さて、ヨハネ 13：1 には、「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」とあります。

また、3 節には「イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り」とあります。

過越祭の前。これは、イエスさまが十字架に架けられる前日のことです。そのとき、イエスさまは、「御自分の時が来た」ことを悟られた、とあります。

それはつまり、「父がすべてをご自分の手にゆだねられた」とあったように、すべての人々を罪から救うために、父なる神さまに遣わされたイエスさまが、いよいよ、罪の贖いの犠牲として、ご自分が十字架に架けられる時が来た。いよいよ救いの御業を実現する時が来た、ということです。

そして、「この世から父のもとへ移る」、「御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしている」と語られているのは、イエスさまが十字架に架けられ、死んで葬られた後。復活させられ、父なる神さまがおられる天に上げられ、栄光をお受けになる。そこまでのことを意味しています。

このように、イエスさまは、これからご自分の身に起こること、為し遂げられること、そしてその意味を、弟子たちの足を洗うという行為を通して、教えようとしておられるのです。

#### <弟子たちの足を洗う>

さて、4 節以下には、イエスさまがなさったことが、こう語られています。

「食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた」。

弟子たちは、あまりにも唐突で、何がなんだか、分からなかったのではないのでしょうか。そもそも、家の奴隷がすることを、自分たちの主人であり、師匠であり、神の御子であるイエスさまが、弟子たちに対してするなんて、非常識すぎて、絶対にあり得ないことなのです。

ですから、一番弟子のペトロは、戸惑ってこう言います。6 節「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」。

それに答えて、イエスさまは言われました。「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」。

弟子たちには、今は、何も分かりません。しかし、イエスさまの十字架の出来事を経験し、そして、復活のイエスさまと再び出会ったときに、弟子たちは、この時、イエスさまがなさったことの、本当の意味を、理解できるようになるのです。

でも、今はただひたすら、弟子たちは戸惑うばかりです。

そこでペトロは更にこう言います。8 節「わたしの足など、決して洗わないでください」。

これは、イエスさまの行為を、拒否する発言です。ペトロの思いは、きっとこうではないでしょうか。

…「わたしの主人であるあなたが、どうして弟子であり、僕であるわたしなんかの足を洗うのですか。それは、あなたがやるべきことではありません。わたしの足は、汚れたままで大丈夫です。あなたに洗っていただかなくてけっこうです。自分で出来るので、やめてください。あなたはわたしの主人なのですから、奴隷がするようなことを、わたしにしないでください。」

ペトロは恐らく必死になって、イエスさまを止めようとしたことでしょう。

自分が従い、仕えている主人が、自分の足元に屈みこんで、自分の汚い足に手を触れて、洗ってくださるのです。わたしたちも、自分の目上の、心から尊敬し、憧れ、慕っているような人に、そのようにされたら、と考えると、その居心地の悪さ、抵抗感、気まずさは、容易に想像できるのではないのでしょうか。

<洗っていただくしかない>

しかし、イエスさまは言われるのです。「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」。

…これは、どういうことなのでしょう。イエスさまは、ペトロがイエスさまに足を洗っていただくのでなければ、イエスさまとペトロは無関係になる、と言われたのです。

つまり、イエスさまとペトロの関係は、イエスさまがペトロの足を洗ってくださることによって成立する関係。イエスさまが、弟子のペトロに、僕のように仕えてくださることによって、成立する関係だということです。

ペトロは、自分の主人であるイエスさまに、自分の最も汚い部分である足に、手で触れていただき、洗っていただくのでなければ。そのイエスさまの行いを受け入れるのでなければ。イエスさまとは、何のかかわりもなくなってしまう、というのです。

主人であるイエスさまの清い御手で、弟子のペトロの体の、最も下の部分にある、最も汚れた足に触れていただくということ。

それは、神さまの最も清い御手で、わたしたちの深い奥底にある、最も汚れた部分。つまり、わたしたちの罪に、触れていただくということです。

先ほどペトロは、イエスさまに、自分の汚れた足など、決して洗わないでください、と言いました。

主人のあなたに、そんなことをしていただく必要はない。申し訳ないし、恐れ多い。こんなわたしの足の汚れなど放っておいてください、と。

でも本当は、そんなことを言っている場合ではないのです。その酷い深刻な汚れは、イエスさまに洗っていただくしか、清くなる方法がないのです。

洗っていただかなくて大丈夫です、などと言って、抵抗しているということは。本人は、後で、自分で洗えば済むことだ。足の汚れくらい、自分で落とせる。これくらいなんともない。そう思っているということです。

でも、それは、自分が抱えている汚れの深刻さを、全然分かっていないのです。

わたしたちも、同じです。自分の罪というものを、あまりよく分かっていなかった時。

あなたの罪のために、神の御子イエスさまが十字架に架かって、あなたのために苦しんで死んで下さった。そう知らされても。そんなことが必要なのだろうか。大げさすぎるのではないだろうか。どうして、神の御子が死ぬことが、自分の救いと関係あるのだろうか。そんな風に、感じたことがあったのではないのでしょうか。

でも、わたしたちが神さまに対して犯した罪は。神の御子イエスさまが、わたしの罪を全部背負って、わたしの代わりに裁きを受けて、十字架で苦しんで、血を流して、死ぬことまでして下さらなければ、決して許されることのない罪だったのです。

わたしの罪は、それほどに、とてつもなく深刻な、深い、重い罪だったのです。

ペトロも、また、わたしたちも。神の御子に、足元に屈みこんでいただき、その手で汚い足に触れていただき、イエスさまの手を汚して、洗っていただくのでなければ。

イエスさまが、わたしたちの罪をすべて被って、十字架で死んでくださるのでなければ。自分では、この罪の汚れをどうすることもできず、その汚れはどんどん広がって、わたしたちを滅ぼしていくばかりだったのです。

わたしたちは、自分でこの罪の汚れを、まったく、どうにも出来ません。少しもきれいにすることが出来ません。わたしたちに出来るのは、洗ってくださる方に、汚れた足を、素直に差し出すことだけなのです。

一方、弟子たちの、わたしたちの足を、洗ってくださるイエスさまは。わたしたちの足がどれだけ汚れているか。わたしたちが罪の中で、どれだけ悲惨で、危険な状態にあるか。そのことを、わたしたち以上にご存知です。

神の御子イエスさまは、わたしたちを、そのような罪から救うためにこそ、父なる神さまから遣わされて、低く降ってきてくださったお方だからです。

そして、わたしたちよりも、更に低いところにその身を置いてくださり、身をかがめ、その清い御手で、わたしたちの汚れた足を取ってくださり、語りかけてくださるのです。

「わたしが、あなたを洗う。わたししか、あなたの足を洗えないのだ。わたししか、あなたの罪を洗い清めることは出来ないのだ」。

神の御子イエスさま、たったお一人だけが、わたしたちを罪の汚れから、清くして下さることがお出来になるのです。

<仕えていただく関わり>

…だから、イエスさまは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と言われたのです。

ペトロと、イエスさまとのかかわり。わたしたちと、イエスさまとのかかわり。

それは、主人であるイエスさまに、弟子であり、僕であるわたしたちが、仕えていただくことによって、成立するかかわりです。イエスさまに、わたしの汚れた足を洗っていただくことによって。イエスさまに、わたしの罪を背負っていただき、代わりに十字架に架かっていただくことによって、成立するかかわりです。

イエスさまは、わたしたちを救うために来られたのです。わたしたちの足を洗って下さるために来られたのです。わたしたちの救い主となるために、すべてを差し出しておられるのです。

この方の、救いの御業を受け入れないなら。足を洗われることを拒否するなら。わたしたちは、この方を「わたしの救い主」とすることは出来ません。わたしたちは、救っていただくからこそ、救ってくださる方とのかかわりが、与えられるのです。

ですから、わたしたちは、まずこの方が、自分にとって、まことに必要なお方であることを、知らなければなりません。

神の御子イエスさまに、洗っていただくことでしか、わたしたちは、汚れから清くなることは出来ないのです。王として来られたイエスさまに、仕えていただくことによってしか、わたしたちは、罪から解放されないのです。イエスさまの十字架と復活が、わたしの救いのための御業であるということを信じ、受け入れ、そこに自分自身をすべて委ねることでは、わたしたちは、救われません。

でも、わたしたちが、洗っていただき、仕えていただき、その御業を受け入れるとき。イエスさまは、わたしたちのまことの王、わたしたちのまことの救い主となってくださり、わたしたちを支配する方となってくださるのです。

ですから、柔和な王である、イエスさまのご支配は、強制的なものではありません。

イエスさまのご支配は、わたしたちが、イエスさまの愛と恵みを知り、この方の他に救いはないと知り、安心して、この方に自分自身を委ねるところに実現します。

わたしたちが、悔い改めと感謝を持って、イエスさまを喜んで、わたしの王、わたしの主、わたしの救い主であると認めるところに、イエスさまのご支配は実現します。

その時、イエスさまは、わたしたちをご自分のものとしてくださり、ご自分と一つに深く結び合わせてくださり、わたしたちの汚れも、罪も、死も、滅びも、すべてご自分の十字架の上に引き取ってくださいます。

そして、わたしたちには、清さと、赦しと、復活と、永遠の命を、惜しみなく与えてくださるのです。

<愛し抜かれる>

神の御子イエスさまが、わたしたちのために、そこまでしてくださいます。

わたしたちの前に屈みこみ、わたしたちの汚い足に手を触れ、洗ってくださることも厭わない。わたしたちを救うために、すべての罪を背負い、苦しみを受け、十字架に架かって死んでくださることも厭わない。どうしてそこまでしてくださるのでしょうか。

…それは、すべて、わたしたちへの愛のためです。

1 節には、こうありました。「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」。

イエスさまは、世にいる弟子たちを愛して、この上なく、愛し抜いてくださいました。

「世にいる弟子たち」。それは、十二人の弟子たちであることはもちろんのこと、ここにいるわたしたちも、含まれています。

そして、イエスさまは、すべての弟子たちの足を、洗ってくださったのです。

そしてそこには、イエスさまを裏切ったユダもいました。2 節には、こうありました。「夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた」。また 11 節には、こうあります。「イエスは、ご自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた」。

さらにもう少し後の 13：36 では、イエスさまが、ペトロの裏切りを予告しておられます。

つまり、イエスさまは、ご自分の弟子たちが、ご自分を引き渡す者、裏切る者、見捨てる者、疑う者であることを、すべて承知しておられたのです。弟子たちは、ご自分を愛し続けることが出来ないことを、すべてご存知だったのです。

でも、その上でイエスさまは、一人一人、すべての弟子たちの前に屈みこみ、汚れた足をその手に取り、彼らの足を洗って、手拭いでふいてくださったのでした。

それは、イエスさまが、一人一人を、すべての弟子を、ただ、ひたすら、心から愛しておられたからです。

イエスさまが、弟子たちや、わたしたちを愛してくださるのは、わたしたちが、従順で、賢くて、裏切らない、誠実な者だからではありません。わたしたちが良い者だから、愛してくださるのではないのです。

むしろ、その全く反対を行くような、どうしようもないわたしたちです。

でもイエスさまは、ただ、わたしたちの存在を慈しみ、尊び、愛してくださっているのです。その愛は、ひたすら一方的で、無条件です。そのような愛が、わたしたちに対する、神さまの愛なのです。

神の御子イエスさまは、わたしたちをお造りになった神さまの、そのような無条件の愛の、広さを、長さを、高さを、深さを、わたしたちに現わしてくださっているのです。

…「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」。

だから神の御子イエスさまは、弟子たちを、わたしたちを、この上なく、最後まで、完全な愛をもって、愛し抜いてくださいます。

この、計り知れない神さまの愛によって、救いの御業がなされることを、イエスさまは、弟子たちの足を洗ってくださることによって、予告してくださいました。

また、わたしたちの罪を背負って、十字架に架かり、復活されることによって、イエスさまは、その愛の御業を、完全に成し遂げてくださいました。

ここにいるわたしたち、一人一人は、そのようにして、神さまに愛され、イエスさまに愛し抜かれた者なのです。

わたしたちは、来てくださったイエスさまが、屈みこみ、わたしの汚れた足を手に取り、洗ってくださることを、ただ受け入れることしか出来ません。

でも、イエスさまは、そうして素直に、わたしたちが自分の汚れを差し出し、罪を差し出し、イエスさまにお委ねすること。そして、イエスさまの十字架と復活による救いの御業を受け入れることを、ただ望んでおられるのです。

イエスさまは、そうして、わたしたちが清められ、罪を赦され、復活の命を与えられ、神さまの愛を心から深く知ること。そして、その愛に、喜んで、感謝して生きようになるためにこそ、子ろばに乗った、柔和な王として。弟子に仕える主人として。十字架に架けられる救い主として、わたしたちのところに来てくださったからです。

このイエスさまを、わたしたちは、わたしの王として、わたしの主として、わたしの救い主として受け入れ、イエスさまとの愛のかかわりの中で、生かされていきたいのです。

### 【お祈り】

天の父なる神さま、御名をほめたたえます。

あなたは貴い御子イエスさまを、わたしたちを救うために、わたしたちの罪の償いのために、お与えくださいました。

その御心に従って、わたしたちを愛し抜き、わたしたちの足を洗い、わたしたちの罪を背負って十字架に架かってくださったイエスさまの御業を、どうかわたしたちが、悔い改めと感謝をもって、受け入れることが出来ますように。

そして、十字架と復活のイエスさまを、わたしの王として、わたしの主として、わたしの救い主として、受け入れることが出来るようにしてください。

イエスさまの救いと、愛による、深いかかわりの中を、生きる者として下さい。

このお祈りを、わたしたちの主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

【讚美歌】 298 「ああ主は誰がため」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讚美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン